

#17 ユニークなソフトウェアの創り方

毎回、さまざまなジャンルで活躍する方々をゲストスピーカーに迎え、新産業の創出へのキモチとモチベーションアップを目指す、モチモチトーク。

2018年2月21日、第17回は、「ユニークなソフトウェアの創り方」。

福島ディレクターより

「仕事ってなんだろう、働くってなんだろう、という疑問を気持ちよく解決してくれる新田さんとの対談、ぜひ、ご覧ください。」



今回の登壇者、新田一也さんが代表取締役を務める株式会社エイブルコンピュータは、1995年創業、スマートデバイス（スマートフォンやタブレット等の端末向け）アプリの制作を主としたソフトウェア開発会社である。一概にスマートデバイスアプリといっても、ゲームから地図、メッセージングアプリなど、さまざまなものがある。そんななか、エイブルコンピュータは、金沢のまちなかを古地図で楽しみながら観光できるアプリ「古今金澤」や、森の環境調査に役立つ森林管理システム「円空」といったように、スマートデバイスの内部にとどまらないユニークなソフトウェアを世に送り出している。

エイブルコンピュータのウェブサイトを覗いてみると、企業理念として「人の道に外れることはしない」という言葉が掲げられている。その後はつらつらと、「カッコ良くて、もっともらしくて、耳に聞こえが良いこと書けなくて申し訳ないです。一番の喜びは、社員皆が平穏な気持ちでいられることだと考えます。そのためには、お金も絶対に必要だとは思いますが、お金や地位や名誉は求めてもきりがないので、心の平穏は少なくなる気がしています。」と記される。加えて、社屋についての小ネタや、社員が屋上で仲良くバーベキューをする様子が記事として載っていたり。ウェブサイトからも、エイブルコンピュータ、あるいは新田さんの、なにやらゆるく心地よい空気感が醸しだされているのがわかる。

お金はないと不幸だけど、追いかけても不幸だな

新田一也さんは、1969年、能美市生まれ。現在は金沢市在住。自分がつくりたいものをつくらうと思い、エイブルコンピュータを立ち上げた。趣味で15年ほど茶道をつづけている。と、ここまでだけを聞くと、まったくもってシンプルな経歴なのだけれど、新田さんという人の味わいは、話を聞けば聞くほどあふれしみ出してくるから面白い。

例えば、15年間続けている茶道に関しても、ついにオフィスに抹茶を点てるスペースを用意してしまったり（本当は茶室をつくりたかったが、仕事で遅くなったらそこで寝ると社員が言ったので「それはなんだか違う」と思ってやめたそう）、金沢で行われた工芸祭で、金沢にゆかりの深かった本阿弥光悦と茶の湯に関するイベントをディレクションしたり。ソフトウェア会社の社長でありながら、一体何者でしたっけと言わせしめるようなことをやってしまう自由さがあるのだ。

そんな新田さんはエイブルコンピュータを立ち上げる前に、2回、一般企業に就職している。まずは小松電子株式会社。開発部門に就職したものの、常に新しい技術を習得し続ける必要のあるシステムエンジニアは、35歳までしか務まらないという説がささやかれていた当時、

長く続けられる仕事に就こうと3年で退職。次いで、産業ロボットをつくる会社に転職した。しかし、その仕事には魅力を感じる事ができなかった。そして、「やっぱりソフトウェア開発をしたい」と実感した新田さん。今度こそは中途半端に手を出すのではなく、自分を追い込もうと決意し、会社を立ち上げた。それがエイブルコンピュータである。

「1995年、バブル崩壊の影響がまだ残っていて、阪神大震災が起こった年でもありました。ここではじめれば、あとはよくなるだけだと思って会社を作りました。けれど、立ち上げたは良いものの、まだ仕事もお金もない。どうしようかな、と考え、分厚い黄色いタウンページの冊子を開いて、上から順番に電話していったんです。『僕、こんなことできるんですけど、お手伝いできることないですか』って。」

当てずっぽうに電話をかけるなんて、今ではちょっと考えられない営業方法だし、おそらく当時でもかなり無茶な方法だったのではないだろうか。でも、それをやってのけちゃうのが、新田さん。

「同業者で小さい会社の方はすごくしっかり話を聞いてくださいましたし、何度かお仕事をいただきました。当時の仕事は、1コードでいくら、という金額の計算だったんですけど、僕って、長いコードは美しくないし、短くきれいなコードを書くことにこだわりをもっているんです。だから当時も、できるだけ短いコードでまとめるんですけど、コードが短くて美しくなればなるほど、収入は少ない、というね。あっと驚くような少ない金額の上に、振込手数料まで引かれちゃったりして、もう大変でした。」

とほほ、である。

加えて、「今に至るまでを考えたいうで欠かせないストーリー」として挙がるのが、「創業当時の大失敗」だ。

「法人化して1年目に、突然、電話がかかってきたんです。『名古屋の会社から特別な話を持ってきました』と。コーヒー豆の先物取引の話でした。儲かると言われて、乗ってしまったんです。当時は会社をはじめたばかりだったのでお金を貯めていたんですが、それをすべて預けました。」

実家の玄関にはカギがなく、夜はつかえ棒をカギ替わりにする、そんなのどかな能美市に生まれ、お父さんが「ネオンを見せてやる」と言っは金沢の国道8号線を走ってくれた。

純粋無垢に育った新田さんだからこそ、「少ないお金でも儲けられ、為替取引も代行してくれるなんて、ありがたい」と、相手の話を思いっきり肯定的に信じてしまったのである。

しかし、結果は、やられ損。後から考えると悪質だったともいう。それでも、「会社のために貯めたお金を取り返さなくては」と発起した新田さんは、ドスの利いた声で脅しにかかる自称支店長にもめげず、「俺のお金にこれ以上手を出すな」と相手に手をひかせ、損失を取り返しにかかる。そうして、毎日毎日、他国の市場の動向を調べ、天気まで調べ、情報を集めるという日々を繰り返した。結果、損失はかなり取り戻せたという。けれども、である。

「朝から晩まで為替を見て、まったく仕事ができなくて。自分は一体なにをやってるんだろうって考えました。お金って一体何なんだろうって。お金はないと不幸だけでも、追いかけていても不幸なんだな、と、痛感したんです。」

これが前述の、企業理念「平穩さを追い求める」につながっていると新田さんは語る。この出来事以降、自分のビジネス以外に投資はしないと心に決めたという。悲劇とも言える話なのだけれど、エイブルコンピュータを今に至らせるうえで必要だった出来事なのかもしれないと、新田さんを見ていると思う。それを乗り越えられたのが新田さんだった、というほうが正しいのかもしれないけれど。

金沢にあこがれて、あこがれをこじらせて。

ところで、失礼を承知で言うと、新田さんは「好き」がわかりやすい人だ。子どもみたいに目を爛々と輝かせて好きなものについて語っている姿は、聞いているほうが微笑ましくなるほどで、新田さんが語るものって、きっと魅力的なものなんだろうなと感じさせちゃう、緩やかな説得力みたいなものがある。そんな新田さんが、「好き」を溢れさせながら語る一つが、ここ「金沢」である。

「僕は能美市出身なんですが、金沢にあこがれ続けていまして。尾張町に家を買って、ついに念願の金沢人になりました。会社も金沢に移転しました。とにかく金沢にあこがれていたんで、あこがれをこじらせて、アプリも作りました。」

それが、金沢古地図アプリ「古今金澤」である。



古今金澤の画面

「古今金澤」とは、簡単に言うと、古地図と現代地図を併用した、金沢の今昔を楽しむことができる観光アプリである。古地図と現代地図を見比べたり、今いる位置を古地図上で把握できる。また、金沢の地名の由来や逸話をまとめた金沢百科事典「金澤古蹟志」を収録しているので、その場所と金沢についての豆知識を知ることができる。

「金沢にはところどころに、あれ？と思わせる場所が残っているんです。例えば、水もないのに、まちなかに橋の跡があったり。それを古地図で調べると、水路があったということがわかったりして、おもしろいです。」

このアプリが成り立つのは、大きな災害や戦火に遭わず、町割りがほとんど変化していない金沢ならではのともいえるのだろう。さらに今後は、このアプリを更に改良し展開したいと考えているという。

「金沢は昔からお茶が盛んだったので、茶人同士の手紙をもとにして、観光ルートをたどれるようなものを提供したいと思っています。歴史上の人物もいろいろ調べています。誰かイラスト化してくれないかな。個性豊かな人がたくさんいるので、伝えていきたいんです。」

ここからしばらく、新田さんは目を輝かせて、千宗室、彦九郎（宮崎寒雉）など、金沢や茶道にゆかりのある人物と、彼らをとりにくく物語を熱く語ってくれた。その部分は橋折るけれども。

機能性が高くてずっと愛されるもの

ところで、エイブルコンピュータの特徴として挙げられるものに、森林ボランティア、音楽祭の協賛などの文化活動支援といった事業外活動がある。これらは一見、ソフトウェア開発と無縁にも思えるものだ。けれども、そこに力を入れるのは、新田さんなりに強い思いがあってこそ。「新田さんが目指すソフトウェアの姿」に通じているからなのだ。

「音楽や自然のなかにある美しさって、一瞬だったり、過酷な環境じゃないと目にすることができなかつたりするんですが、長く評価されてきたものって不変的なものだと思うんです。そんなふうに、自然や美術、文化といった美しいものに触れることが、自分たちのソフトウェアをつくる時に影響してくるんじゃないかと思っていますし、そういうところに、自分がつくるものを近づけていきたい。ソフトウェアは便利さを追求するイメージが強いですが、機能性が高くてずっと愛されるものを目指したいんです。」

ソフトウェアはある意味でカタチを持たない、概念としては無機質なものである。日々大量に新しいアプリが開発され、使い手は、便利さやスピード感のようなものを求めることも多い。そんななかでも新田さんは、単に「もっと便利に」「もっと早く」といった機能性だけではなく、ある意味デジタルの世界とは対にある、「自然的なもの」、「美しさや心地よさ」を追求している。このことが、新田さんのアプリのユニークさにつながっているのかもしれない。「古今金澤」や「円空」は、まちを歩くことだったり、木を調べることだったり、実際の行動があることが前提になっているものだし、人と世界との関わりの中に、アプリがあることで、その関係性や行動が増幅する。新田さんがいう「自然的なもの」「美しさや心地よさ」というのは、単に表層的な意匠だけではなく、それらが含む温度のようなことも含有しているのだろう。

とはいえ、である。ここまで新田さんの話を聞いていると、作っているアプリがどうもマニアックすぎる。お金を追いかけない、平穏さを追求するとはいえ、いかんせん社員をかかえた株式会社である。これで生計が成り立つのかというのは、下世話だけど気になる部分でもある。

「正直、これらのアプリは今のところ、あまり収益になっていません。うちの会社は主に受託開発で売り上げをたてるのがメインです。だから空いた隙間時間につくっているの、なかなか、開発が進まないんです。」

「今後は仕事につなげていきたいと思っているのですが・・・」とつづける新田さんの言葉に、一社員であれば、「しっかりしてよ、社長ってば」ともなりそうなところだが、きっと、そうならないのが新田さんの人徳。社長が先立って自由に自分がつくりたいソフトウェアをつくっているのだったら、社員も、自分がつくりたいものをつくろうと思えるかもしれない。社長の想いにふりまわされていたら困ったものだけど、「社員も、『結構いいんじゃないか』と言ってくれています」と控えめな新田さんが言うのだから、きっと「いい」んだろう。

「もちろん、辞めていった人もたくさんいます。どんどん儲けてキャリアアップしたい人はうちには合わないですね。いくら儲かるかというゴールではなく、どれだけ楽しいか。それで少し食っていける。それが大事ですね。」

そして、新田さんはふと社長顔になり、今後の進退について少しだけ顔を曇らせる。

「本当は55歳で退きたいと思っていたんですよね。自分が、会社の成長の障害になる気がして。社員が許してくれるならこのまま社長という立場で続けるかもしれませんが、私は誰か代わってくれませんかと言っているんです。もっと優秀な人がいるし。私もソフト開発でやりたいことがあるので、それをやらせてくれるなら、社長じゃなくても良いんじゃないかなと思っています。」

これが新田さんらしさなのだと感じる一節だった。創業者でありながら、「自分が会社の成長の障害になるかもしれない」と思える社長はなかなかいない。好きなものをつくりたかったから、自分で会社を立ち上げた。シンプルだ。肩書がほしくて社長になったわけじゃない。きっと、このスタンスがエイブルコンピュータに浸透していて、なんだかんだとそれを楽しんでいる社員の人も多いのではないだろうか。だから、社長が一社員になるという形も、新田さんならありえそうだなと思う。

「趣味に関してはノータッチだし、怒ることもない」という奥さんは、会社を辞めるという話をしたときだけ、「ちょっと怒って」いたそうだけれど。



話し手

新田 一也 株式会社エイブルコンピュータ 代表取締役

聞き手

福島 健一郎 IT ビジネスプラザ武蔵交流・創造推進事業運営委員会ディレクター（アイパブリッシング株式会社 代表取締役）

文

鶴沢木綿子